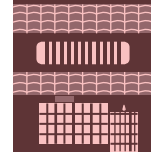


# 京町家通信

KYOTO' s  
きょうの  
TODAY' s



MACHIYA  
まちや  
MACHIYA

KYOMACHIYA PRESS Vol.132  
2023年3月 発行



## 1月勉強会：設計塾OBによる京町家改修事例紹介



1月の勉強会は設計塾OBであり一級建築士の富田貫之さんと滝本耕二さんをお迎えして開催されました。

富田さんは土木・建築の補修・補強工事を専門とする会社にお勤めで、その会社のモデルハウスでもある民家の改修工事についてご紹介されました。

滝本さんは元大工で現在は建築士として設計事務所を営んでおられます。建築家目線ではなく現場寄りの軽快な目線でいくつか改修事例をご紹介いただきました。

富田さんが手掛けられた建物は沙桜里庵(さおりあん)と呼ばれ、亀岡の稗田野神社参道鳥居の脇に位置する民家で、大正時代に建てられた延床面積40坪程度の木造二階建の入母屋造の建物です。当建物は歴史深い稗田野神社のもとでの地域交流やコンサート、研修施設などとして活用することを目的として改修された、会社のモデルハウスです。

改修におけるコンセプトとして、基本を踏襲しつつ更新していくという考えのもと、田の字型建物平面のオモテ側は、玄関土間から座敷が二室並ぶ既存の構成を維持しつつ、奥側にはキッチン付の広い土間空間と板敷の舞台を設けるといった計画がなされています。建物の性能を上げる改修として、断熱・耐震改修が積極的に施されており、屋根には高性能グラスウール14K 145mm、外壁には荒壁外側と柱面のチリにスタイロフォーム 25mmを充填した上に、付柱などを用いて真壁風の大壁として意匠を整え、開口部にはアルミ樹脂複合サッシが用いられています。

また当初は石場建の基礎でしたが、今回の改修工事では立上り付きのベタ基礎とされています。立上りの幅は一般的には150mmが採用されることが多いですが、本建物においては240mmとられており、地震の揺れを低減するためにあえて基礎と緊結しない当建物が地震時に基礎から滑り落ちてしまわないよう考慮されています。またその基礎立上りには基礎断熱が施されています。

耐力壁としては、既存土壁の修繕に加えて、工期短縮が可能な荒壁パネルを用いることや、格子壁を新設することで、建物が粘り強くなるようにされています。梁と束の仕口補強には縄がらみSRF工法と呼ばれる新技術が採用されており、部材同士をポリエステル繊維のベルトで巻きつけ、ベルトをウレタン系靱性接着剤で固めた上に化粧用のポリエステル組紐を巻きつけるやり方で、祇園祭の山鉾に採用されている「縄がらみ」を参照してとのことでした。

また代替的な根継の方法として、部材同士にホゾ穴状の欠取りをし、そこに長さ100mm程度の鉄筋とエポキシ樹脂を突っ込み固めることで、雇いほぞ状のものをつくり出すということや、木部の虫喰い穴にエポキシ樹脂を充填し塗装することで、埋め木の代わりになるといったこと等も紹介されました。

昨今、建物個別の耐震性や断熱性の向上が求められる中、伝統的な建築においてもそれらの性能の向上化を無視するわけにはいきません。とはいえ性能向上を求めるあまり、建物自体に無理を強いてしまい建物の寿命を縮めてしまう恐れも否定できません。そのあたりのバランス感覚を探りつつ改修設計を考え、あらためて、伝統的な構法を操る職人さんや伝統的な材料のことをも思い返す事に繋がった貴重なお話でした。

続いて、滝本さんの事例のお話しにうつります。多数の物件の写真を軽快なトークとともにご披露頂いたため、内容の説明をしにくいのですが、お話の結論のなかでとても印象的だった一言をご紹介させていただきます。

「建物が100年後も健全であることを狙うのではなく、20年、30年後に少しでも健康な状態を保つことで次世代にバトンタッチできるよう、なるべく余計なことをしない。」

「100点満点ではなく、50、60点を狙う。」100点満点中120点を狙ってしまうあまり、腰が重くなり数につながらない私の働き方によって、ある意味目からウロコのお話でした。

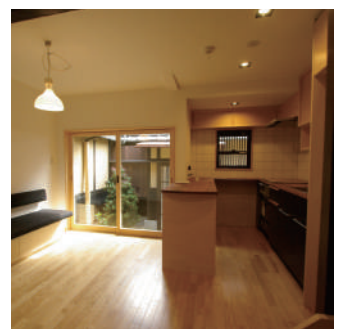
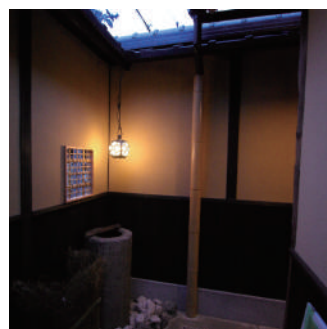
通りの中に、取り残されたようにポツンと町家が建っている景観は寂しいものです。やはり点ではなく線のように連なってこそ、町家の景観の魅力は増します。

町家を徹底的に触り出したら泥沼の様に時間がかかってしまう場合もあるでしょう。それはそれで大切な事なのですが、線的に町家が連なる景観を望むのであれば、滝本さんの様な軽快さに学ぶところは非常に大きいと痛感した次第です。

京町家再生研究会 会員 中川幸嗣



写真提供 富田貫之



写真提供 滝本耕二

八竹庵見学会

中川等先生を講師に招いて



京都市内の木々も少しずつ色づいてきていたこの日。「八竹庵」の見学会を実施しました。

八竹庵は旧川崎家住宅として長年公開されていた建物です。大正15年、室町随一の豪商「四代目井上利助」が贅の限りを尽くして完成させた大型の京町家です。今回の見学会ではこの建物について、京町家再生研究会の会員でもある中川等先生にご講義いただきました。中川先生は学生時代にこの建物の大々的な調査研究に携わっておられます。

八竹庵の和と洋が折り重なる独特な意匠、建築当時の最先端技術などについて、詳しく説明と解説をしてくださいました。講義の後には、中川先生、オーナーの黒竹さん、スタッフの皆さんと一緒にご説明を受けながら建物内をじっくり見学しました。この建物の大工方はオーナーの黒竹さんのご先祖にあたります。建物に対する黒竹さんの強く熱い思いと、スタッフの皆さんのあたたかい思いやりあるケアは、八竹庵をますます美しくしており、訪れるたびにそれを感じます。八竹庵の今後の楽しい活用の展開について、私たち再生研も一緒に考えていこうと盛り上がりました。

八竹庵のInstagramでは、建物の美しい日常を紹介されています。ご訪問される前にも、ぜひともご覧ください。

京都市指定有形文化財 くろちく「八竹庵」  
京都市中京区新町通六角上る三条町340  
Instagram: @hachikuan.kyoto

西陣まち歩きと  
「西陣麦酒」見学会



11月のまさに小春日の日。京町家友の会の秋の例会を実施しました。

今回は「千両ヶ辻界わい景観整備地区」の北側、今出川大宮を上がったあたり、個性豊かな京町家を見て歩きました。ここには、京町家友の会・京町家再生研究会の本部のある中京とは少し趣の違う、糸屋や織元といった西陣織の生産地を感じる町並みがまだ残っています。

まちあるきの最後目的地には、千両ヶ辻のまさにすぐそばにある大きな町家「ヒーローズ」さんを見学しました。築140年超の大型の京町家には、母屋と土蔵2棟、庭があります。現在は障害者福祉就労施設として活用、今後は、春にはクラフトビール「西陣麦酒」の工場も移転してきます(詳細はInstagramをご覧ください)。

大宮道り沿いには、生産地西陣を感じる業種以外に、ギャラリーやデイサービス、小中学生の学習塾が京町家を利用されています。これらの事例は、私たちにとっても大型町家の保全再生の可能性を考える良いアイデアとなりました。まちあるきはとても楽しくて、他にもどこか遠足に行こう!と、会員さんと盛り上がりました。

自宅でヒーローズさんからお土産にいただいた「西陣麦酒」を飲みつつ、京町家の未来に想いを馳せた一日でした。

社会福祉法人菊鉾会ヒーローズ  
京都市上京区大宮通今出川下ル薬師町234  
Instagram: @nishijinbeer

Photo by 野村浩二(京町家友の会会員)

特定非営利活動法人 京町家再生研究会  
京町家友の会

604-8214 京都市中京区新町通錦小路上る百足屋町 384 番

TEL 075-221-3340

FAX 075-231-0727

E-mail saisei@kyomachiya.net (京町家再生研究会)  
tomonokai@kyomachiya.net (京町家友の会)



京町家情報センター

604-8241 京都市中京区三条通新町西入釜座町 32 番

TEL 075-213-1430

FAX 075-213-3013

E-mail johokai@kyomachiya.net

オーナー登録数: 延 239

ユーザー登録数: 延 1867

物件登録数: 延 2253

成約件数: 延 245

(2023年3月1日現在)